

# PBL

Project-Based Learning

## 推進支援センター通信

VOL. 17



2018年度秋学期成果報告会の様子

同志社大学PBL推進支援センターは、PBLの理論と実践を推進する拠点として2009年に設立され、PBLのモデル開発、運営支援、研究会の実施等、様々な活動を行ってきました。その成果をシンポジウムや教育フォーラムとして公開してきました。

今回は「SNS時代のPBL—アクティブな学びを救うのか、壊すのか—」と題し、今や我々にとって欠かせない道具・技術になっているSNSを、PBLにおいて学びを深めるためにどのように展開していくべきかというテーマのもと開催したフォーラムを特集しています。SNSには様々な利点と欠点があり、アクティブな学びを救うのか、壊すのか、PBLの推進に関わっている方々と共に考察を深める機会になればと思っています。

## SNS時代のPBL

### —アクティブな学びを救うのか、壊すのか—

同志社大学PBL推進支援センター長  
文学部教授 新 茂之

2018年12月1日(土)に開催した本年度のPBL教育フォーラムの主題は、「SNS時代のPBL—アクティブな学びを救うのか、壊すのか—」であった。

SNS(Social Network Service)は、インターネットを通じてひととひととのコミュニケーションを促進したり支援したりして、そのような結びつきの組織を構築していくためのサービスである。SNSは、ひととひとのつながりを即座に広い範囲で築きあげるの、きわめて効率的で便利な道具である。しかしながら、多くのひとびとが指摘するように、SNSは、危険性をも孕んでいる。その一つは、こうであろう。SNSは、仮想的な空間のなかで繋がりを編みあげており、ひとびとを現実的な世界から遠ざけてしまう、と。

PBL(Project-Based Learning)は、ある企画を立て、それを現実化していくために、学びの共同体を形成し、その成果を明示していこう、という活動である。ここでは対面のコミュニケーションが重要になるし、立てた計画は現実的な世界と切りむすんではじめて有意義になる。この点からすれば、SNSは、PBLのアクティブな学びを阻害するかもしれない。しかし、ほんとうに、そうだろうか。

コミュニケーションでは、まず、話し手は、聞き手にことばを投げかける。聞き手は、そのことばを手がかりにして、話し手の意図を掴もうとする。とはいえ、ほかのひと

の心のなかを覗くことはできない。だから、聞き手としてのわたくしたちは、話し手の思いを想像するしかない。話し手の気持ちは、わたくしたちにとっては仮想的である。わたくしたちは、それに依拠して、応答する。相手も、わたくしたちの気もちを想像するしかなく、それをもとに、ふたたびわたくしたちに語りかけてくる。このようなやりとりが順調に進んでいけば、わたくしたちがそれぞれの心のなかで形づくっている仮想的な空間は、現実的な色彩を帯びてくる。

さまざま交通と通信の手段は、わたくしたちの活動の範囲を広げてきた。それと同じように、SNSは、わたくしたちの仮想的な空間を拡大させている。確かに、自動車は自然を破壊しているし、インターネットではサイバー攻撃が起こっている。SNSは、わたくしたちの現実を蔑ろにし、PBLをだめにするかもしれない。とはいえ、自動車もインターネットもわたくしたちの生活になくしてはならない。だから、SNSが拡張する仮想的な空間とわたくしたちの現実的な空間とは、接触を通じて、たがいに反発したり融和したりしながら、わたくしたちの日々の生活の連続性を生みだしているのではないか。このように考えると、SNS時代のPBLの位置は、SNSの仮想的な空間とわたくしたちの現実的な空間との接点にある、と言えるであろう。

# PBL推進支援センター主催教育フォーラム SNS時代のPBL—アクティブな学びを救うのか、壊すのか—

## 大学事例報告



北九州市立大学 教授 地域創生学群学群長  
地域共生教育センター長

### 眞鍋 和博 氏

#### 【北九州における実践型大学教育】

北九州市立大学地域創生学群は、地域課題の解決に向けた実践活動が必修科目として組み込まれており、学生は1年次から3年次まで継続して同一地域・テーマに関わり活動し続ける。商店街活性化、ESD、耕作放棄地対策による地域活性化、障がい者スポーツ、高齢者の生活支援など、その領域は多岐にわたり、現在16ほどのチームが活動する。その最大の特徴は、学生たちが地域の方々と日常を共有し、地域の運営主体としての位置付けをいただき活動することである。土日や長期休暇、授業時間といった大学の「都合」を押し付けるのではなく、まさに地域の営みとともに学生の活動が存在するのである。したがって、自ずと活動にかかる時間が長くなる。同時に学生のために「用意された」場面ではなくリアルな現場を体験するために、想定外が多く発生する。それをマネジメントしつつ、乗り越えていくことが実習教育の要点である。そのような活動を推進していく中でSNSの役割は重要である。学生同士の連絡、情報共有、イベント時の集客広報、振り返りなど、様々なシーンでSNSが活用されている。他方、SNS等のメディアに頼りすぎてしまう傾向も見られることも課題である。

#### 【プロフィール】

リクルート出身。キャリアセンター専任教員を経て2009年地域創生学群専任、2013年から現職。Project-Based LearningやService-Learningを地域で展開するためのコーディネートや学生指導を行う。現在、約40プロジェクト700名の学生が地域で活動している。また、同大学地域共生教育センター長等、地域連携や学生成果の可視化に関するプロジェクトのリーダーを務める。また最近では、ESDやSDGsといった社会の持続可能性と教育の関係について実践と研究を行っている。



新潟大学 教育 学生支援機構キャリアセンター  
副センター長(准教授)

### 西條 秀俊 氏

#### 【新しい学びのスタイル—若手社員の研修と学生の学びの接続—】

国や経済界では、高い職業意識の育成、職業適性や将来設計について考える機会として、多様な形態の産学連携教育を推奨している。本学では今年度(2018年度)より新潟県で初の試みとして、企業の研修も兼ね、若手社員と学生がチームを形成し、企業の課題に取り組むPBL科目「企業人と学生のハイブリッド(社会とキャリア選択A)」を開講した。

本プログラム「企業人と学生のハイブリッド」は、京都産業大学において、2014年度経済産業省「社会人基礎力を育成する授業30選」に採択されるなど、キャリア教育分野の先端事例となっている。具体的には、企業の若手社員と学生の混成したチームが数ヶ月間、実際の企業課題に取り組み、キャリア教育の中で共に学び、共に気づき、刺激し合いながら成長していくプログラムである。その過程で学生は、SNSも活用しながら、メンター(若手社員の上司)や若手社員の本気の姿と向き合い、企業のリアルな「内側」に踏み込んでいく。

最終報告会では、受講生40人(企業11社から社員11人、本学学生29人)が、チームに分かれて「より安全・快適に高速道路を利用するためのAI」、「テクノロジーに特化したデザイナーの人材不足」などの課題に取り組んだ成果をメンターに対して発表し、その質の高い内容に、来年度以降の期待がさらに膨らんだ。

#### 【プロフィール】

2005年より新潟大学キャリアセンター専任教員。2018年より副センター長。金融機関にて、営業を経験した後、人事採用・研修責任者として人材育成に関わる。現在は、1級キャリアコンサルティング技能士資格などを活かし、キャリア教育等の教育、学生支援を行う。新潟大学長期・有償型インターンシップ、経済同友会連携・長期インターンシップ等の企画立案及び実践に関わり、高い教育的効果を生み出す。専門は、キャリア教育、産学連携教育(インターンシップ)、若年者のキャリア意識形成など。



同志社女子大学 学芸学部 音楽学科 嘱託講師

### 大江 宮子 氏

#### 【音楽・若者・ラジオの力が高齢者に元気を与えることができるのか】

2012年～2017年まで、プロジェクト科目を担当した。その概要を報告する。

授業の始めには、10分間、滑舌の練習として、母音の無声化や鼻濁音、アクセントや敬語の練習などを行い、どんな業界の方々とも堂々と話ができるように行った。

2012年～2014年は「音楽は心の薬—高齢者に音楽環境を整える・ラジオを活用して」をタイトルに学生が高齢者に音楽を提供するだけでなく、高齢者と一緒に音楽コンサートやミュージカルを行い、その様子をラジオ関西やラジオ大阪において、オンエアした。また、2014年、グラミー賞受賞者のグレンベレス氏が来日することを知り、学生が交渉してインタビューする機会を得、歌とパーカッションなど、2つの事を同時に行うことが脳の活性化に有効であることを学びミュージカルにも取り入れ活動を行った。

2015年～2017年は、「ラジオで発信—高齢者と若者の音楽イベント制作」では、音楽イベント企画班とラジオ番組企画班に分かれて活動し、ラジオ番組では、YouTubeでのライブ配信やTwitterでラジオとの同時放送を実施した。その結果ラジオ局にリクエストやお手紙などが届き高齢者が行動を起こすこと、元気を与えたことが分かった。

#### 【プロフィール】

奈良女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程修了。博士(学術)。2005年ラジオの仕事で、敬老の日に「入居者と歌おう」という企画で老人ホームから、生放送でラジオ中継した。それを機に、ラジオと音楽が高齢者にとって元気になる可能性を強く感じ、高齢者問題に取り組んだ。2005年から、KBSラジオ、2012年からラジオ大阪、ラジオ関西、FM宇治、FMラジオカフェに出演している。2012年～2017年まで、同志社大学プロジェクト科目「ラジオで発信—高齢者と若者の音楽イベント制作」の科目担当を行った。

## パネルディスカッション



同志社大学 元PBL推進支援センター長  
文学部教授

### 山田 和人 氏

#### 【第2部パネルディスカッションの総括】

今回のパネルディスカッションでは、SNSを無意識に使っているうちにPBLの学びの共同体が脆弱化させられるのではないかという問いかけと、SNSが当たり前にある環境においてPBLを実践する中で、それをいかに使うべきなのかという問いかけが浮かび上がってきた。そして、そこに学びの共同体を不安定にする可能性や危険性に対する共通認識があるように見えた。

別の言い方をすれば、SNSを無意識のうちに使っていると、そのメディアの守備範囲に止まってしまうことになりはしないか。たとえていえば、日本語変換機能を使っているうちに一般的に変換されやすい表現を使うようになってしまい、特徴的な表現、独創的な表現を遠ざけるようになっていく。それと同じことがPBLの場合も起こっていないか。それでは創造的な学びを深めることにはならない。

実はPBLの学びは本質的にSNSの特性である利便性や効率性という面では劣っている。むしろ、非効率な学びであり、粘り強い持続的な思考のプロセスこそが生命線だ。それを支えるのが学びの共同体だ。SNSを無意識に使っていると、いつの間にか利便性や効率性を優先するものの見方に陥り、PBLの学びが阻害されることになるのではないか、そんな危機感から出発しなければならない時代なのだと実感させられた。

#### 【プロフィール】

文学部教授(国文学科)。専門は日本近世文学。江戸時代前後の文学や芸能、国内外の人形芝居の調査・研究。日本近世文学学会常任委員、芸史研究会評議委員、長浜市文化財審議委員。2006年度プロジェクト科目の開講から運用に至るまで深く関わり、2009年より2018年3月まで同志社大学PBL推進支援センター長を務めた。

## フォーラム開催報告



12月1日、今出川キャンパス良心館204番教室において、PBL推進支援センター主催教育フォーラム「SNS時代のPBL—アクティブな学びを救うのか、壊すのか—」を開催しました。当日は、大学教職員、その他教育機関の教職員、学生など、全国より80名を超える皆様にご参加いただきました。

第1部では、北九州市立大学、新潟大学、同志社大学の、各大学教員によるPBLの取り組み概要についての報告、および各大学の学生による実践報告がなされました。各大学の教員からは、実践型教育の理念やカリキュラムの紹介があり、それぞれの地域の課題に対して学生がどのようなアプローチによって取り組みをしているのかについて概要が語られました。各大学の学生からは、PBL科目の活動内容の報告、その活動の中で学生がSNSの特徴に応じて使い分けをし、活動に即して改善を加えられた実例が紹介されました。また、その過程で見出された課題、考察、および今後の展望が述べられました。

第2部では、各大学でPBL科目を学んできた3名のパネリストが、同志社大学元PBL推進支援センター長山田和人教授のコーディネートのもとでパネルディスカッションを行いました。パネルディスカッションでは、SNSがPBL教育における集団的学びを深化させていくのに有効に働くのかという問いかけについて、3名のパネリストが具体的な事例をもとにそれぞれの視点から見解を述べられました。その後、参加者との質疑応答においてSNSの具体的な活用法について議論がなされました。第1部の実践報告をふまえて、SNSの利点である即時性や利便性の面と、SNS上のコミュニケーションではメンバー間の温度差が生じやすく意志形成にはやや不向きである面などについて、意見が交わされました。議論の最後に、PBLの活動をするにあたっては、SNSをどのように活用すべきかという課題に意識的に取り組んでいかなければならない、SNSを適切に活用しかつリスクを避けて一番根幹になる学びの深化という部分に集約していくことができるのかということが今後の大きな課題となってくる、そのことを会場の方々とも共有し、フォーラムは閉会となりました。



## 2018年度プロジェクト科目 秋学期関連事業開催報告

### ◆2018年12月10日(月) 秋学期プロジェクト・リテラシー講習会

パワープレイス株式会社小出暢氏を講師に迎え、「ポスターセッション実践演習」と題してプロジェクト・リテラシー講習会を開催しました。

春学期の第1回講習会の内容を発展させ、今回は、ポスターセッションのワークショップを通じて、分かりやすく、正確に、魅力的に伝えるための技術を伝授していただきました。ポスターセッションにおいて、伝えたい内容を正確に、かつ相手の印象に残るように伝えるにはどのようなプレゼンテーションが必要かについてレクチャーがありました。その後のワークショップでは、春学期に作成した成果報告ポスターを用いて、各クラスごとに履修生がセッションを行い、講師陣によるデモンストレーションも行われました。参加した履修生からは、自身の課題や、本番で改善すべき点や重視すべき点が理解できたとの意見があり、秋学期成果報告会に向けて有益な講習会となりました。



### ◆2018年12月17日(月) 秋学期履修生懇談会

### ◆2019年2月2日(土) 秋学期科目担当者・代表者懇談会

履修生懇談会では各プロジェクト科目の履修生代表が一堂に会し、それぞれのプロジェクトでどのような活動を行っているのかについて報告が行われました。自分たちのプロジェクトにおいて注力している点や苦労している点について詳しく語られ、他のプロジェクトの履修生が真剣に聞いている様子が印象的でした。次に、各プロジェクト活動における課題点について履修生代表間で共有・議論がなされました。クラス内での役割分担やメンバー同士の意見の調整、スケジュールの策定・進行などについて、課題点および改善策が語られました。プロジェクト科目検討部会部会長の伊達立晶教授より、それぞれの課題に対して改善に向けてのアドバイスがありました。秋学期成果報告会を約1ヶ月後にひかえ、他のクラスの活動状況や課題点を知ることで自分たちのプロジェクト活動を客観的に振り返る機会を得て、履修生にとって有意義な懇談会となったようでした。



また、科目担当者・代表者懇談会では、初めにプロジェクト科目検討部会部会長の伊達立晶教授から今年度の振り返りや授業アンケートに関する報告、説明が行われました。その後、各担当者・代表者から今年度の授業運営や履修生の特性について感想が述べられました。さらに、プロジェクト科目において履修生が獲得しうる能力、活動のプロセスと成果物制作とのバランスについて、および成果報告会の審査基準などについて活発な意見交換がなされ、次年度に向けて示唆に富む懇談会となりました。

### ◆2019年1月15日(火) 第3回SA/TA協議会

各クラスに1名ずつ配置しているSA(スチューデントアシスタント)、TA(ティーチングアシスタント)が集まり、第3回目の協議会を開催しました。今回は、それぞれのプロジェクトを振り返り、履修生の活動をサポートする中で見出された問題点と反省点について、互いに報告し合いました。履修生の自主性を重んじるプロジェクトを進めるためには、どのようにフォローをするべきか、履修生同士で意見のぶつかり合いがあった場合や、役割分担が適切になされていない場合などに、SA/TAがどの程度関わるべきか悩んだ事例等について意見交換がなされました。また、過年度と同じテーマを扱う場合、過年度の活動の蓄積を引き継いで今年度の活動に活かさないかとの意見がSA/TAからありましたが、プロジェクト科目検討部会部会長の伊達立晶教授は、プロジェクト科目は各年度の枠組みの中で、その期間内に履修生が主体となって完結させることが絶対条件であるとの見解を示されました。SA/TA各自の振り返りにおいて、履修生の活動を見守りつつ適切な助言を行うことの難しさと、履修生のサポートをする中で、自身が気付きや学びを得られたとの意見が述べられました。SA/TAのより望ましいあり方について意見や提案を共有することができ、参加者それぞれに得るところの多い協議会となりました。



### ◆2019年1月20日(日) 秋学期成果報告会

全学共通教養教育科目「プロジェクト科目」では、各学期の授業期間終了時に、京田辺校地・今出川校地開講クラスが一堂に会し、学内外に向けて成果報告の場を設けています。

2018年度秋学期成果報告会は、ポスターセッション形式で開催され、春学期・秋学期連結科目14クラスの履修生が、活動の成果をまとめたポスターをもとに最終報告を行いました。

当日は小雨が降る中、京都のみならず他府県からも企業や教育機関関係者、本科目の過年度履修生、授業協力者、保護者の方など約190人の参加があり、会場は終日熱気に満ちあふれていました。

ポスターセッションでは、履修生がこの1年で様々な困難な課題に一生懸命取り組んだ成果をもとに、積極的に聴衆に声をかけ自分達の活動の経緯や成果を丁寧に伝え、説明を受けた聴衆からは質問を投げかけられるなど活気ある議論が繰り返されていました。特に今年度は、春学期末に実施予定であった成果報告会が台風の影響で中止になったこともあり、最終成果報告会に注がれる履修生の熱意が例年以上に見られました。

表彰式の講評では、ポスターの出来、不出来の差が大きいという厳しい指摘があった一方、過年度よりも「対話」重視のセッションを行った高いレベルのクラスが多く、履修生のプロジェクトに対する意識の高さがうかがえるといった評価も寄せられ、この経験を社会に出てからも活かして欲しいと更なる進展を期待する声がかかりました。

最後に、最優秀賞、優秀賞および特別賞の表彰が行われました。最優秀賞は同じ得票数でそれぞれ2クラスが受賞するという接戦となりましたが、終了後の履修生たちの顔は達成感に満ちた晴れ晴れとしたものでした。

- 最優秀賞:留学生と創る!!「祇園祭を支える町衆文化読本」制作プロジェクト(伝統文化継承と地域文化創生の観点から)〈今出川校地開講、春・秋学期連結科目〉  
:あなたがプロデューサー、KYOTO和婚の魅力を世界に発信プロジェクト 〈今出川校地開講、春・秋学期連結科目〉
- 優秀賞:絵本は心のごちそう・プロジェクト 〈今出川校地開講、春・秋連結科目〉
- 特別賞:スポーツイベント企画・運営のマーケティング実践～生涯スポーツの推進に向けた陸上競技の大会の開催～ 〈京田辺校地開講、春・秋連結科目〉



### プロジェクト科目とは?

2006年度から始まった「プロジェクト科目」は、教員が一方向的に知識を伝授する講義スタイルとは異なり、履修生自身が構想、計画をし、ディスカッションを重ね、行動する実践型スタイルの授業です。全学共通教養教育科目であり、学部・学年の垣根を越えてチームとして共に活動し、プロジェクトを推進していきます。

### 新センター長のつぶやき



### 同志社大学PBL推進支援センターの新 茂之センター長によるコーナーです。

PBLは、ほんとうに必要なものか。はじめのころは、そんなふうに考えていた。それは、長いあいだ日本の伝統的な学びの様式で育ってきたわたくしの正直な感想であった。PBLに係わるようになって、そんな思いは、完全になくなってしまっている。わたくしたちは、いろいろなことにさまざまな挑戦していかなければならない。その意味で、わたくしたちの人生は探究である。PBLこそ、探究の学びにほかならないのである。